「雲は天才である」論

上田博

一

石川啄木の作家的出発は明治三十九年七月であった。この月、啄木は「十夜以上」も徹夜をして「雲は天才である」と「面影」の二篇を書いた。「面影」は「雲は天才である」の執筆途中から書き始めて百四十枚ばかりで脱稿した。「雲は天才である」の方は脱稿できず、この年の十一月にも若干の改稿をしたがついに完結せず未発表作品になった。

「石川啄木論のひとつの基礎」[1]として彼の小説評価の重要性を指摘したのは窪川鶴次郎であるが、氏は啄木がこの時期に作家的出発を志した文学的欲求のよって来たるところについて、当時彼は「詩人としての才能をおおいにみとめられていたということ、啄木の性格が非常に自負の念に強かったということ、詩集『あこがれ』の刊行直後に結婚して一家五人の経済的な責任を負わねばならなくなったということ」[2]といった三つの事情を挙げている。窪川の挙げた三点のうち「経済的な責任」を除いてこの時期に作家的出発をする直接的な理由にはなりえない。この間の理由を以下考えてみたい。

啄木は六月十日から十日間、学校の農繁休暇を利用して父の宝徳寺再住運動のために上京し、新詩社へ立ち寄り、そこで藤村、漱石らの近刊小説を読んで帰郷した。啄木は藤村が詩から小説への転進を『破戒』において成し遂げた様子を目のあたりに見て、「自分だって小説は書ける」という自負心が激しく燃えあがった。

予は幾夜か筆を嚙んで瞑想せり。かくて遂に或る必至の要求に応ぜんがために本月三日の夕より「小説」の筆を起せり。蓋し詩人の一切の武器のうち、小説ほど白兵戦の突撃に有効なる武器はなければなり。[3]

ここで言う「或る必至の要求」とは何か。

帰郷後の日記に漱石、藤村を批評したのち「これから自分も愈々小説を書くのだ」と言い、その場合も自分は「周囲から刺激をうけて進む手合とは少々格が違ふ」と断わることを忘れない。啄

木上京の文学的成果は漱石や藤村によって作家的出発の決心を与えられたことであった。

雑誌『小天地』発刊のスポンサーであった大信田落花との間の金銭問題が村内の反石川派の何者かによって〃告訴事件〃としてフレームアップされたのは八月に入ってからであり、啄木は落花に〃告訴〃取り下げを哀願する手紙を書いている。この手紙で、自分が小説を書き始めたのは「それにより得べき原稿料を以て、兄に対する昨年来の不義理を償はむとする」ためであったと弁解しているが、小説執筆を開始した七月初旬には借金返済はほとんど彼の念頭にはない。事実、〃告訴〃事件直前の日記に「都合よく『面影』の稿料が来れば、北方の海岸へ行って大に海の空気を吸ひ、そして大いに書かうと思ふ」などと呑気なことを考えているのである。現実にさし迫った一家の「経済的な責任」を負うことなど彼の念頭にはない。

七月二十日頃に書かれた「八十日間の記」と題する日記に、

予は六月の初め十日を異様なる精神興奮の状態に過した。社会と習慣と規則とに対する一切の不平は危うく爆発しやうとした。爆発せんとして未だ発しえざる生命の煙はムラムラと胸の中に渦巻いて居た。予は此時、三月以後、予自身を中心としたるこの村の種々の騒擾を採って、他日の大小説を物しやうと思ふた。これは遠からず必ず出来る筈である。

「三月以後」の「村の種々の騒擾」とは、啄木一家の渋民村再入村以来の宝徳寺再住問題、啄木の渋民小学校赴任をめぐる「騒擾」をさしている。村内は一禎再住を支援する親石川派、これを阻止しようとする反石川派に二分し、抗争は学校をも捲き込んでその様相は啄木に言わせると「十九世紀の初の仏国王党と革命党との戦争」という状態であった。

「六月初め十日」間の「異様なる精神興奮の状態」とは石川陣営の有力なシンパの一人であった村役場の畠山助役が「群犬の奸悪」によって突然辞職に追い込まれ、村内における一禎再住運動に一大打撃を加えられたことをさす。「小説を書かねばならぬ」という気持はすでに早く、渋民再入村の二日後（三月六日）の日記にしるされているのであるが、この気持は村の騒擾の高まりとともに発酵し、六月の上京以前にピークに達していたのである。

夏目漱石は森田草平に「小説とか何とか云ふものは必ず一足飛びに大作は出来るとは限」[4]らないと言い、地味な勉強に励むよう教示しているが、啄木は三月以後についてみても一篇の習作も試みていない。村の騒擾を題材にした「大小説」が「遠からず出来る筈」であると自負するが、このことばには何の現実性もない。「革命の健児ではない」と啄木に一蹴された藤村は『破戒』の稿を起こすにあたって「人生は大なる戦場である。作者は則ちその従軍記者である。」と記し、「生死を賭する戦場にゐる覚悟で、執筆にかゝったのである。」[5]と並々ならぬ決意を示している。

そうして藤村は詩から小説への転身のために三年間の習作期間を自らに課した。

自分の第四詩集を出した頃、わたしはもっと事物を正しく見

ることを学ぼうと思ひ立った。この心からの要求はかなりはげしかったので、そのためにわたしは三年近くも黙して暮すやうになり、いつ始めるともなくこんなスケッチを始め、これを書きつけることを自分の日課のやうにした。(6)

『千曲川のスケッチ』で磨かれた「事物を正しく見る」目が『破戒』のリアリティを支えている。漱石は『破戒』を「明治の小説として後世に伝ふべき名篇」(7)と讃辞を贈っているが、彼自身も「文学を以て生命とするものならば」「神経衰弱でも気違でも入牢でも何でもする了見でなくては文学者になれまいと思ふ」(8)と言い、専門作家へ旅立つひそかな決意を示している。

啄木が自分の小説を『帝国文学』や『早稲田文学』といった一流文学雑誌に発表し、大阪毎日にも応募して「一つ世の中を驚かしてやらう」と真面目に考えるとき、彼の胸中では自分の詩壇上の成功がそのまま作家的成功へと何の疑念もなく直接的に信じられたのである。だから文壇への売り込み第一作『面影』が、「今の世で筆で立つといふ事は到底至難」であるという後藤宙外からの老婆心からの手紙が原稿とともに返送されてきても、

これ篇中に大に今の小説家を冷罵したる条あるが故に、お得意の寄稿家の怒りを買はむことを恐れて、雑誌社は面影の掲載を肯んぜざりしに候。(9)

と言ひ放って省みることはない。宙外らの啄木の小説評価が「今の小説家を冷罵」した作品内容に反撥を受けたのだというようにもっぱら作品の受け取り手の個人的、私意的判断の結果であると考え、文壇的潮流、社会的要求の視点からの自己点検はついに行なわれることはない。猪野謙二氏は啄木の作家的出発を「初期自然主義との出合いがもつ積極的な意味」(10)づけの下に見ることを指摘されているが、啄木が小説を書きはじめた内的動機――「或る必至の要求」が初期自然主義文学精神とどのようにかかわり合っていたかを「雲は天才である」の作品構造のなかに探ってみたい。

二

「雲は天才である」は啄木が自ら「日本一の代用教員」をもって任じた渋民尋常小学校における教員生活（明治三十九年四月十一日～同四十年四月二十二日）に題材をとった作品の一つである。

主人公新田耕助（あら）はS―村尋常高等小学校に着任して三ヶ月、二十一歳の青年教師で月給は八円。尋常科二年の担任である。四月四日に平野郡視学の尽力で着任できたいきさつがある。彼は別名白牛、詩人であり小説も手がける文学青年。自分の希望で高等科の生徒に「課外授業」と称して初等の外国歴史と英語を教授する。彼は十三歳から十六歳の「青春の火盞」に「一切の精神」を投げ込むことに生きがいを感じている。文部省の定めた「細目といふ矢釜敷お爺さん」などは屁とも思ってはいない。新田の唯一の理解者は二十四歳の女教師山本孝子で、独身の熱心なクリスチャン。讃美歌が上手で思想健全。尋常科一年の受持である。この二人に対立する俗物が校長と首席訓導。田島校長は鼻下に「亡国の髭」

である八字髭を蓄え、「平凡と醜悪とを教育者といふ型に入れて鋳出した」ような人相。「正真の教育者」は「完全無欠な規定の細目」にあると信ずる愚物。村内最高の十八円の月給を取り、学校の宿直室に一家四人が住居する。校長の細君は夫君を尻に敷く女傑。（彼女は「マダム馬鈴薯」「化生の者」「垢臭い女神」「頭痛の化生」などいろ〳〵な悪罵で形容される。）

校長の太鼓持は古山首席訓導。土着の教員で、十年余も勤務して、ここ五年間は十三円で辛抱する「意気地のない奴」。得意技は夫婦喧嘩と酒と昔の女の経験談、それに釣道楽である。この四人の教員の他、「仏様」と渾名される忠太という小使がいる。

プロローグはこの小学校の職員室風景。壁の掛時計が「活気のない懶うげな悲鳴」をあげる。この時計は「K停車場の大時計」と正確に合ったためしがない。学校教師の単調、凡俗な生活の象徴である。それだけではない。歴史の流れからも置き去りにされている生活圏の象徴でもある。成績、欠席の調査、書類作りなど雑務に余念のない職員室の風景は「地獄」世界であり、この世界の主は「向上といふ事を忘却した精神の象徴」田島校長と「主義も主張もない」幇間者古山ら掛時計的人物である。彼らの教育理念は教育勅語的な「完全なる教育」であり、彼ら地獄世界の獄卒に鋭く対立するのは「ナポレオン・ボナパルト」「日本一の代用教員」を自負する新田耕助とその一派である。彼らは極楽世界の住人であり、この世界こそ「生命反乱の活画図」である。ナポレオン皇帝こと新田の放つ火箭に炎上する「紅血の油を盛った青春の火盞」は五十幾人のジャコビン党党員こと生徒たちであり、この両者が渾然一体となったところに「生命反乱の活画図」が現出する。

校長の課外教授〃弾圧〃に端を発した〃革命的奔流〃は掛時計的＝教育勅語的な〃反革命派〃田島＝古山一派を嘲弄し、ついに理論的に地獄の獄卒を打ち負かし、〃革命派〃の頭上に「美しい光栄の花環」「全勝の花環」をもたらす。

こうしたロマン的反抗を支える創作主体の基本的な世界認識は「現実の世界」と「詩の世界」という単純な敵対矛盾として把握されている。啄木にとって「詩人」とは「普通の人間」ではなく、「詩神の奴隷」であり、美の神の使徒である。新田＝啄木は小児にも大人にもナポレオンやビスマルクについて熱弁をふるうが、この歴史上の人物はいつしか新田＝啄木に乗り移り、彼自身が〃反乱軍〃の将軍の座に坐る。さらに「詩人は実に人類の教育者」であると自負するとき、学校の人的構成部分は一人残らず彼の指揮下に入らなければならない。指揮下に入れば善玉、さもなくば悪玉のレッテルが貼りつけられる。

啄木はこの時期ワグネルに心酔する。彼の理解によると「人生の真諦」は「意志拡張と自己発展にありとする個人主義を立てた」ニイチェと「意志消滅を以て真正の福祉に至る唯一の路」であると説くショウペンハウエル、トルストイらの示した「人生の二大根本事実」を止揚したワグネリズムにあるとする。

ワグネルは「意志といふ言葉の語義を拡張して、愛を自他融合

の意志」とみるいわゆる「積極的な愛」を説く。

啄木の理解したワグネルの「意志拡張の愛」は人間諸関係のなかでどのような相を顕現するのだろうか。

新田耕助が田島校長の中にみたのは「醜悪」という個人的欠点であり、「田島校長＝O」の打撃的な数式も「一毫の微と雖ども自分の気に合ふ点がなかった」（傍点―上田）からである。啄木が渋民小学校に着任した日の校長の第一印象を「師範出の、朝鮮風な八字髯を生やした、先づノンセンスな人相の標本」と書き、最初から反感を露骨にあらわしている。作品の生原稿には「田島」名の上に「遠藤」名を書いた薄紙を貼ってあり、「マダム田島」は「マダム遠藤」そのままになっており、文献学で言う見消になっていると岩城之徳氏は指摘している。[11] 新田の田島校長への反抗は明らかに啄木自身の遠藤校長への個人的嫌悪をふまえている。校長への憎悪の深さはたとえば彼の子供へも報復される。「マダム馬鈴薯」の胸で乳房を放さない幼児は「強慾な児」であり、この学校の生徒であるもう一人の子供も「革命の健児」＝ジャコビン党員から「時ならぬ拳の雨」を降らされてもいささかの同情心も示さない。学校の小使の「忠太」名にしても遠藤校長の実名―忠志を戯画化したものと考えられる。校長の幇間者古山にしても「当年二十一歳の自分と話が合わない」ことが彼への悪感情の底流にある。（古山は「古山朴の木」と形容されているが、「林中日記」によると「朴の木」的人間とは「頭悩に血の足らない人」「空腹の時と、春画を見る時と、酒の香を嗅ぐ時と、新聞の講談を読む時の外は、一切物に感ずる事」のない人間であるという。）

この時期に啄木は小説を「社会変革の有力な手段」として捉え、したがって「雲は天才である」は「教育批判―社会批評」を通して「社会革命」を指向しているという見方がある。[12] しかし、新田の作詞・作曲による校友歌を生徒たちに学校に無断で歌わせたとして文部省の「規定の細目」をかざして攻撃する校長＝古山一派に対して理論的に論破し、「全勝の花冠」が新田派の頭上に輝くことがどうして「社会革命」の展望を拓くことになるのであろう。田島校長批判を通して社会的反抗が組織され、強権的国家に迫っていくことはない。当時、啄木は小説を「武器」に閉塞された個人的状況に「白兵戦」を排んだのである。

啄木における「革命」は個人的反逆でありこの意味における「革命」すら幻想としての反逆でしかなかった。現実的な場における閉塞状況を、書くことによって打開しようとした。だからこそ小説を書くうちに精神は幻想的な勝利に「異様な興奮」を覚えたのである。

作品の後半（第二章）、新たに登場する人物は石本俊吉と天野朱雲の二人である。ナポレオン＝ジャコビン党の革命派が王党派に決定的な勝利を収めた職員室に、新田をたずねて石本俊吉が登場する。石本は六月末に袷を着、独眼で肉塊の一断片の如き乞食然とした風体の男である。素姓は没落した中等農家の出。苦学生で八戸で父の死の悲報を知り、故郷静岡への帰路、彼への援助を依頼する朱雲（石本の先輩）の手紙を持って新田を訪れたという次

第。後半は石本を通して語られる朱雲に焦点が移動する。彼はもとこのS―村に生まれ、S―村小学校に高等科のなかった単級時代に卒業。この「人生の戦士」はかつて監獄の看守を勤めたのち赴任した学校で「鯰髭の随分変挺な高麗人」の校長と激論して、六月十四、五日頃に突然免職になったという。（この校長のイメージも田島校長に重なる。）「人生の戦士」朱雲の人生観は「人生はトンネル」であり、「処々に都会といふ骸骨の林」があるだけで「脚の下にはヒタ〳〵と永劫の悲痛が流れて居る」という。また彼は「人生は長い暗い隧道」であり、「壮烈な最期を遂げるまで、戦って」戦って戦いぬかなければならないと石本を激励する。後半には新田らは後景に退き、石本のモノローグを通して天野朱雲がクローズアップされる。（「自然生の大放浪者」「人間の一断片」の石本や、「監獄に看守の職を奉じて居た」事もあり、「人生の横町許り彷徨いて居る」朱雲らのイメージは「浮浪者上りの幾度となく監獄の門をくぐった肺病患者のゴルキイ」に重なる。）[13]

作品が前半と後半（第一章と第二章）とでは主題が分裂しているとする見方がある。つまり「失意と窮乏の現実が後半の悲痛な沈潜した気分となり、前半の革命的気分を裏切る」といい、その意味を「リアリズムへの一歩前進であり、空想から現実への一歩を踏み出した」[14]という。

文体面から見ると前半は校長一派と新田一派の対決を軸に軽快なテンポが生む切れのよいリズムが貫流するのに対して後半はモノローグが全体を覆い、リズムは停滞する。主題が分裂しているところから文体の変化が生じたのではない。小説構成が破綻したのである。構成上の分裂、破綻は新田一派の全面的な勝利の裡に内包していたのである。つまり小説のプロットの内在的な推進力であるドラマ的矛盾が前半において解消してしまったからである。矛盾の止揚がなされたのではない。〃革命派〃のエネルギーが〃王党派〃のエネルギーを殲滅させてしまったのである。それでは後半に書き継がれたモチーフは何であったか。それは「美しい光栄の花環」に飾られた新田耕助の人生観を天野朱雲に託して語ることである。（「世界滅尽の大活劇」を演じる新田と、「人生の戦士」朱雲は「彼我二人の間は、真に同心一体、肝胆相照すといふ趣きの交情」の関係であり、二人の人物形象は同一人物に収斂される。）

石本が「天野君は確かに天才です。豪い人です。」と言うとき、その言葉はそのまま新田の自己讃美に転置することができる。以上のように考えてみると、前半と後半とが主題的に分裂しているのではなく、構成上の破綻である。

結局のところこの作品は現実の渋民小学校校長遠藤忠志（作中の田島）を中心とする校内反石川派（と啄木は信じていた）と村内の同派による〃政治的包囲網〃（地獄世界）に対峙して「極楽世界」という〃自由の共和国〃を学校という〃小天地〃に幻想的に構築したところに成立した。「極楽世界」が「地獄世界」に屹立し、純粋世界として存立し、ついには対立のエネルギーを一方が他方を消滅させるという文学的発想の歴史的意味を以下で考え

てみたい。

三

啄木が小説に筆を染めた三十九年から四十三年の五年間の数的推移を見ると、三十九年（二）、四十一年（十）、四十二年（六）、四十三年(三)となっており、問題にしている三十九年は全小説(未完も含む）二十二のうちわずかに二作品にすぎないが、構想された数は材料のみも含めると十九にも及ぶ。

一方、歌作は三十七年(三十五首)、三十八年(三十二首)、三十九年(一首)、四十年(百二十九首)と推移し、詩作は三十七年(六十三編)、三十八年(四十一編)、三十九年(十二編)、四十年(十二編）というように量的推移を示している。この数字から判断すると三十九年の啄木は作家的出発を遂げることで自己と世界の抒情的表現から構造的表現への文学的模索に向っていたことは間違いない。しかし表現の転換を迫る文学的主体は成熟していたのであろうか。

岩手県は天明、天保以来の惨状と言われた三十五年の大凶作に続いて、さらにそれをしのぐ大凶作が三十八年に襲われた。この年は春から霖雨低湿の不順天気で、九月に入ってからは暴風雨の追い打ちを受けた。結果米作は平年作の六十六%もの減収で、気仙郡のごときは平年の七%しか収穫できない有様であった。[15]岩手は平時でも一反歩当りの米の収穫は東北六県中の最下位であり、[16]啄木の住む岩手郡は生産高一人当りの順位で県下十四郡で八番目という低さである。このような生活水準の低さは連続的な大凶作の前にはひとたまりもなかった。啄木は書いている。

今日から綿入を脱いだ。みちのくの三月、雪が一尺もある国で、袷に襦袢で平気なのは、自分と凶荒に苦しむ窮民のみであらう。そのためでもあるまいが、この夜、政府が窮民に売る一食一銭六厘の軍用パンを小児らに買はして喰って見た。[17]教員生活も生活の糧とするには安定した経済生活を保障しなかった。

実は私も去る十四日より愈々当村小学校に奉職の事と相成り、目下毎日出勤罷在候が、去る廿一日の月給日にも請求致し候ひしも俸給金村役場より出来ず、（中略）これは昨年の凶作の影響にて村税未納者多く、村費皆無のために候、誠に困り入り候。[18]

借金返済の啄木流の弁解ではない。深刻な飢餓的な生活現実が横たわっていた。雪の凶作地に入った朝日新聞社特派員は、小学校児童の出席が三十九年一月には六割に充たず、登校する生徒のほとんどが足袋をはかず、弁当を持たず、四分の一の児童は教科書や筆墨を持たないと報道している。[19]救援の声が国内外に広がり、東京市内の各小学校では筆紙墨などを現地へ送る運動が進められ、遠く米国、韓国からも救援の手がさしのべられた。

「雲は天才である」は凶荒の渦中にあった小学校を舞台にした作品であるが、不思議なほどこうした生活現実は暗い影を落していない。たとえば新田の名付ける「地獄世界」――放課後の職員

室で教員の「成績の調査、欠席事由、食料携帯の状況、学用品の供給の模様」などの仕事は彼に言わせると「名目は立派でも殆んど無意義な仕事」として嘲笑される。教育の統計それ自体は「無意義な仕事」ではない。統計を「無意義」化する政治の機能こそ問題であるのだし、さらには「無意義」な統計の示す「八四・七九」%の出席歩合の持つ意味も着目しなくてはなるまい。ナポレオン・ボナパルトこと新田先生の情熱の受け皿になる「十三、十四、十五、十六といふ年齢の五十幾人」の生徒たち、ここにも貧窮のために入学学齢をオーバーした彼らの生活の姿が露出している。[20]「日本一の代用教員」の月給が八円であり、前借りなしには食っていけない生活と、個人的憎悪の集中砲火を浴びる「村内最高の十八円」の月給をとる校長が学校の宿直室に一家四人が起居する生活現実とどれほどの相違があろう。啄木自身に、自己の生活と周囲とに深い人間的な関心や、その現実がどんなに醜悪に満ち、絶望的な様相を示していても見るべきものはどこまでも耐えつつ直視するという文学精神が底流しておれば、この作品は明治社会の貧困という岩盤を洗う歴史的な意識と合流し、初期自然主義文学の潮流とも合流するはずであった。しかし啄木の処女小説に示された批判精神の本質は、その集約的表現である校長批判を例にとれば、校長の俗物性それ自身への批判であった。俗物性のよって来たる歴史的基盤を洗い出していく方向にではなく、俗物性そのものへの反逆でしかない。俗物性のよってくるところのものを内部から現実に即して改変していこうとする方向性を見失っている限り、その批判精神のもつ進歩性も一定の限界を持たざるをえない。俗物性の内部からそれを乗り越えていこうとする民衆と同一基盤に立つかに見えながら、本質的には民衆とは無縁の地点に進み出てくるのである。

啄木から「革命の健児ではない」と一蹴された藤村は『破戒』において、部落民丑松の形象を通して体制の内側にひざまづき、寄り添う形でしか生きえない時代の人間の苦悩を表現し、また差別の構造のなかに組み込まれた人々の側にも、――たとえば、維新の変遷によって零落し老残の身を晒す教員や、秋の収穫物を無残に収奪される小作人などの境涯にも深い同情の目を注いでいるが、藤村のこうした人間造型を支えているのは日露戦争などに示された歴史認識である。『破戒』の稿を続けた当時を回想して次のように書いている。

> 戦争が長びけば長びくほど、私の周囲にあった町の空気はシーンとしたものと成って行った。(中略)大きな戦争の影響は私達の日常生活にまで深刻に浸って来て、それを自分の身にひし〳〵と感ずるやうに成ったからである。私はあの戦争の続いた年の冬に馬場裏の草屋根の下で『破戒』の稿を続けた当時のことを忘れかねる。[21]

民衆は戦争の人間的悲惨を全的に背負いながら、むしろそれをテコにして戦争の狂熱をつくり出した支配者のナショナリズムから、息を潜めながら徐々に離れていった。藤村は民衆のひそやかな呼吸に自らの呼吸を重ねながら『破戒』を産んでいった。

啄木は地元新聞岩手日報の三十九年元旦号第一面に長大な評論「古酒新酒」を発表する。啄木は、日露戦争の屈辱的な戦勝が「民族的膨張力」の未熟さ、民族的代表者である「天才的一大人格者」を生まなかった近代日本の畸型性に原因すると主張する。「戦争の影響」が日常生活にまで深刻な影を落す民衆の生活現実には関心はない。自らは「一食一銭六厘の軍用パン」を食べながら、読売、毎日、万朝報、岩手日報の四紙を購読し、河野広中らの兇徒嘯聚事件や、モロッコ、南洋の暴徒事件などに敏感に反応する。

文壇的には初期自然主義文学が興隆する気運のなかで啄木は自らの作家的出発点を生活的＝民衆的現実を捨象した〈観念〉の場に求めた。「雲は天才である」はこのような〈観念〉の場に成立したが、しよせん生活的肉体を持たない〈観念〉はまもなく打ちこわされ、風化せざるをえない。後年啄木が時代の基本的な矛盾と激突し、厳しい思想的、文学的営為へと進み出ていく淵源は、以上述べ来たったような作家的出発のありようの中にすでに胚胎していたのである。

（補注）

（1）（2）「作家啄木」（『石川啄木』所収）

（3）佐々木理平治宛明治三十九年七月二十七日付書簡

（4）三十九年二月十五日付書簡

（5）「第三巻の後に」（『藤村全集』大正十一年刊、第三巻々末）

（6）「千曲川スケッチ奥書」

（7）森田米松宛三十九年四月三日付書簡

（8）鈴木三重吉宛三十九年十月二十六日付書簡

（9）大信田落花宛三十九年九月二十五日付書簡

（10）「啄木入門」（『明治の作家』所収）

（11）「解題」（『啄木全集』筑摩版・第三巻）

（12）「『雲は天才である』覚え書き」鈴木敏子（『日本文学』七十四年八月号所収）

（13）啄木のゴーリキー崇拝は早くも三十五年七月二十日付、小林茂雄宛書簡にあらわれている。「ゴルキイの『鷹の歌』御覧になったでしょふ。あの鷹は最高なる人間の典型である。僕は敢て『清い生涯』とも叫ばぬ。『隠者の生活』とも云はぬ。『高いこと』之は最も価値ある言葉である。」

大谷利彦氏の調査によれば、啄木の諸文中にあげられている外国文学者名の頻度は第一位ニイチエ（四十一）、ゴーリキーは第二位（三十九）を占めている。（『啄木の西洋と日本』）

（14）（12）と同じ。なお久保田正文氏なども「前半の代用教員新田耕助と校長との対立を描いた部分と、後半のインテリ浮浪者とでもいうべき石本俊吉を造型した部分とが二元的に分裂」していると述べている。（『啄木小説集』・春秋社版・解説）

（15）『岩手県災異年表』中央気象台盛岡支台刊

（16）『岩手県勢要覧』大正四年刊

（17）三十九年三月十二日付日記

（18）太田駒吉宛三十九年四月二十三日付書簡

（19）「雪の凶作地」特派員楚人冠（大阪朝日新聞・三十九年二月十日付）

（20）明治二十三年制定の小学校令によると「児童満六歳ヨリ満十四歳ニ至ル八箇年ヲ以テ学齢トス」とあり、四十年までこの規定で実施される。

（21）（5）と同じ。